

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

■ 2023年8月31日(木) 10:10 ~ 12:10 | 血 RY303 良心館3階 R Y 3 0 3 番教室

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／「多様性」を实践するとは一その理想と難しさの狭間で―

コーディネーター：周東 和好（上越教育大学）、山口 理恵子（城西大学）

本部会では、「人びとの生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成してゆくか」を上位課題として、1年目は体育学に潜む暴力性に焦点をあて、既存の学問のパラダイムや制度設計に存する課題を省察し、2年目はパラスポーツの实践を手がかりにしつつ、スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」がいかにして可能になるのかについて議論した。集大成となる今年度は、「多様性」を实践することの理念と困難さについて議論し、多様なスポーツ文化を醸成するための課題や指針を提示・共有することを目的としている。特にシンポジウムでは、社会運動や学校文化、行政の現場における「多様性」の实践によってもたらされる変化を確認するとともに、その实践の具体的な課題を明らかにすることで、既存の価値や行動への問い直しの機会につながることを期待している。

[スポーツ文化-SB-1] LGBTQ+の活動から見る多様性の实践とは

*杉山 文野¹ (1. 株式会社ニューキャンバス)

[スポーツ文化-SB-2] 市民ランニングによる多様性の实践

*山西 哲郎¹ (1. 群馬大学名誉教授)

[スポーツ文化-SB-3] 体育授業において男女が共に学ぶこと

*近藤 智靖¹ (1. 日本体育大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／「多様性」を实践するとは—その理想と難しさの狭間で—

コーディネーター：周東 和好（上越教育大学）、山口 理恵子（城西大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY303 (良心館3階 R Y 3 0 3 番教室)

本部会では、「人びとの生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成してゆくか」を上位課題として、1年目は体育学に潜む暴力性に焦点をあて、既存の学問のパラダイムや制度設計に存する課題を省察し、2年目はパラスポーツの实践を手がかりにしつつ、スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」がいかにして可能になるのかについて議論した。集大成となる今年度は、「多様性」を实践することの理念と困難さについて議論し、多様なスポーツ文化を醸成するための課題や指針を提示・共有することを目的としている。特にシンポジウムでは、社会運動や学校文化、行政の現場における「多様性」の实践によってもたらされる変化を確認するとともに、その实践の具体的な課題を明らかにすることで、既存の価値や行動への問い直しの機会につながることを期待している。

[スポーツ文化-SB-1]LGBTQ+の活動から見る多様性の实践とは

*杉山 文野¹ (1. 株式会社ニューキャンバス)

<演者略歴>

1981年東京都生まれ。フェンシング元女子日本代表。

NP法人東京レインボープライド共同代表理事を務めながら、全国各地でLGBTQに関する啓発活動を行う。2021年よりJOC並びに日本フェンシング協会の理事も兼務。著書に「元女子高生、パパになる」（文藝春秋）など。

「多様性が大事」と言葉で言うのは簡単であるが、多様な人々の多様な意見は多様すぎてまとまらない。また「マイノリティの意見を大切に」と言いながら多数決で決めるわけにもいかず、多様性社会推進における意思決定は非常に困難である。そのような中で、性的少数者の権利獲得のための人権啓発イベントであり、多様性の祭典である「東京レインボープライド」はこの10年で急成長を遂げた。新宿二丁目のLGBTQ+タウンでお店お営むママや全国各地のLGBTQ+当事者から、一部上場企業、各国大使館や国会議員などを幅広く巻き込み、2012年に5000人だった参加者は2023年には24万人を超えアジア最大級となり、LGBTQ+の認知拡大に大きく貢献している。本シンポジウムでは、多様な立場や意見を取り入れながらひとつのイベントに集約する過程において、どのような課題と向き合い実践してきたかを紹介する。また、NPO法人東京レインボープライドがコンソーシアムメンバーを務める「プライドハウス東京」プロジェクトにも触れることで、LGBTQ+とスポーツが直面する課題を共有し、社会×スポーツ×多様性の議論を深めたい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／「多様性」を实践するとは—その理想と難しさの狭間で—

コーディネーター：周東 和好（上越教育大学）、山口 理恵子（城西大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY303 (良心館3階 R Y 3 0 3 番教室)

本部会では、「人びとの生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成してゆくか」を上位課題として、1年目は体育学に潜む暴力性に焦点をあて、既存の学問のパラダイムや制度設計に存する課題を省察し、2年目はパラスポーツの实践を手がかりにしつつ、スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」がいかにして可能になるのかについて議論した。集大成となる今年度は、「多様性」を实践することの理念と困難さについて議論し、多様なスポーツ文化を醸成するための課題や指針を提示・共有することを目的としている。特にシンポジウムでは、社会運動や学校文化、行政の現場における「多様性」の实践によってもたらされる変化を確認するとともに、その实践の具体的な課題を明らかにすることで、既存の価値や行動への問い直しの機会につながることを期待している。

[スポーツ文化-SB-2]市民ランニングによる多様性の实践

*山西 哲郎¹ (1. 群馬大学名誉教授)

<演者略歴>

昭和43年3月 東京教育大学大学院 体育学研究科 修士課程修了

昭和43年4月 東京教育大学 体育学部 助手

平成5年4月 群馬大学 教育学部 教授

平成11年 日本体育学会 会長

1970年代の市民スポーツ、特に、ランニングは中高年の市民によって生活化され生涯スポーツの主たる種目になって今日まで至っている。それは前回の本シンポジウムの「身体・組織・支援の観点から」と合わせて検討すれば十分に理解できる。

市民によるランニングの普及は、欧米を中心に運動不足対策として科学的に有酸素運動としてのジョギングが認められたからである。そこで、障害者にもラン・ウォークが適した運動として実践され、特別支援学校の生徒にとっても身体的にも心理的にも同様である。

75年にホノルルマラソンは心臓病のリハビリで回復した患者のための大会を年齢は11歳以上、42.195kmを制限タイムは問わない条件で始めた。そこで、学校生活のなかで健康と楽しみづくりを日常化して、その目標として高等部の修学旅行としてこの大会に参加することとした。各生徒に伴走者をつけ、走と歩の組み合わせを繰り返す技術を身につけ、全員がゴールを目指すことにある。それには、長時間わたって継続する心身の困難を、走る楽しさをもって、参加者と共有できる感性を持てるように努めた。

障害が社会的不利にならないようにする、それには能力不足の改善と社会的条件を改善することを前提にして、従来、創り上げてきたランニング文化を全うできるのである。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／「多様性」を实践するとは一その理想と難しさの狭間で一

コーディネーター：周東 和好（上越教育大学）、山口 理恵子（城西大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RY303 (良心館3階 R Y 3 0 3 番教室)

本部会では、「人びとの生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成してゆくか」を上位課題として、1年目は体育学に潜む暴力性に焦点をあて、既存の学問のパラダイムや制度設計に存する課題を省察し、2年目はパラスポーツの实践を手がかりにしつつ、スポーツにおける／をとおした「多様性と調和」がいかにして可能になるのかについて議論した。集大成となる今年度は、「多様性」を实践することの理念と困難さについて議論し、多様なスポーツ文化を醸成するための課題や指針を提示・共有することを目的としている。特にシンポジウムでは、社会運動や学校文化、行政の現場における「多様性」の实践によってもたらされる変化を確認するとともに、その实践の具体的な課題を明らかにすることで、既存の価値や行動への問い直しの機会につながることを期待している。

[スポーツ文化-SB-3]体育授業において男女が共に学ぶこと

*近藤 智靖¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

日本体育大学児童スポーツ教育学部教授。日本スポーツ教育学会理事長。（公財）日本学校体育研究連合会理事。筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻博士課程修了 博士（体育科学）。白鷗大学を経て現職。専門は体育科教育学、スポーツ教育学。

現行の中学校学習指導要領解説保健体育編では、「体力や技能の程度及び性別の違い等にかかわらず、仲間とともに学ぶ体験は、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けた重要な学習の機会であることから、原則として男女共習で学習を行うことが求められる」（文部科学省、2018）といった記載があり、男女が同じ場で共に学ぶことを強く推奨している。こうした施策の背景には、共生社会の実現やジェンダーの問題等の現代的な課題がある。しかし、長年、学校現場で男女別習を展開してきた保健体育教師たちの間には、この施策に対する賛否が見られており、批判的な声も少なくない。男女が共に学ぶことについては、その意義を理解しつつも、体力や運動能力の差異、安全性、動機づけ等の生徒の資質・能力の視点から批判的な見解を持つ教師も多い。また、生徒の男女比率や教師側の指導の不慣れ等の組織・運営上の視点、さらには、教師自身が男女共習の授業経験を生徒としてしてきたかなど、教師の経験の視点もあり、様々な議論が展開されている。

こうした論議を踏まえ、今回のシンポジウムでは、以下の三つの話題に触れたいと考えている。

一つ目は、学びの保証の視点である。男女が共に学ぶことを想定した場合、男女を別習とするのか共習とするのか、といった組織の問題のみならず、生徒にとってどのような学びをもたらすか、個々の生徒の学びはどう保証されるものか、という視点からも議論が必要であると考え。その際、包摂性（Inclusion）、公正性(Equity)という視点も踏まえて検討をしていく。二つ目は、我が国の体育授業におけるジェンダー問題について OECDが発行した報告書の内容について触れる。三つ目は、可能であれば所属先大学の授業の取り組みについて触れる。